探訪 北の風景 57

住民が造り支える慈愛と光と希望の館

旭川市・三浦綾子記念文学館

萩本和之

小雪が降り、わずかに雪が積もり、道路はツルツルに―。12月1日、雪がなかった札幌からJR旭川駅を一歩外に出ると「氷点のまち」旭川は、もう真冬のようだった。

駅裏から「氷点通り」の氷点橋を渡り、真っ直ぐ約1・5キロ歩く。外観は変形12面体の素朴な趣がある2階立ての三浦綾子記念文学館（館長・田中綾北海学園大学文学部教授）に到着。建物は綾子さん（1922～99年）の代表作『氷点』の舞台となった静寂な外国樹種見本林（通称：見本林＝みほんりん）に包まれ、入り口には綾子さんが揮毫（きごう）した「氷点」の文学碑が出迎えてくれた。

この一帯の「三浦文学ワールド」は今年11月に「北海道遺産」に認定されている。

文学館は綾子さんが亡くなる直前の1998年に旭川市民や三浦ファンの善意で建設された「民設民営」。今年で20周年を迎えている。本館隣は今年9月29日にオープンした分館（口述筆記館）で、市内にあった綾子さん宅2階の書斎も移築、復元された。

文学館は〝奇跡の人〟綾子さんの文学や生い立ちの一端を「五感で感じもらえる展示」になっている。本館は今年4月にリニューアルされ、コンセプトは1階が綾子さんの人生や哲学に「触れる」、2階は三浦文学の導きの扉を「開く」、分館は光世さん（1924～2014年）、綾子さん夫婦の生活ぶりを「感じる」ように工夫されている。

この日は1階ホールを利用してクリスマス会が開かれていた。子どもが大好きだった綾子さんは47年前から自宅で催してきており、『氷点』の執筆よりも大事」というぐらい思いを込めた行事。大きなご夫婦のツーショット写真の前に約20人の親子らが集まり、音楽などを楽しんでいた。2階の特別企画展コーナーでは収蔵品展「『氷点』あれこれ博物館」（3月31日まで）が行われており、映画化された際のポスターや生原稿などが分かりやすく飾られていた。

また分館へ足を伸ばすと、1971年に綾子さんが自宅を新築した折に、お祝いとして長机を贈ったという福田エイ子さんと、知人の村椿洋子さんのお二人がたまたま来られていた。二人とも三浦さんご夫婦が通っていた旭川六条教会の信者。綾子さんが紡ぐ文章を光世さんが長机の上の原稿用紙に書き取る様子などを思い出しているかのように静かに書斎部分を見入っていた。

光世さんと綾子さんの結婚翌年から始まった三浦家のクリスマス会を引き継ぎ、今年も行われた文学館ホールでのクリスマス会。腹話術やピアノ演奏などを親子が楽しんだ

三浦文学は世界14カ国で翻訳、18カ国で出版されて、4000万部を超え今も読み継がれている「世界の財産」。このため、外国からの見学者も数多く、旭川の観光スポットとなっている。外国人向けに、多言語対応で展示解説をしているほか、スマホを使ってのAR（拡張現実）サービスも導入し英語、韓国語、中国語（繁体字）3カ国が簡単に表示できる。また若者を呼び込むために、映

20年前（1998年）に3億円の浄財で建設された三浦綾子記念文学館の本館1階。綾子さんの人生や作家活動に「触れる」ことができるほか、中央にぶら下がっている紙には綾子さんの珠玉の慈愛にあふれた言葉が記され、「触れる」

像を楽しめるよう視聴覚室も設けている。

この文学館の特色の一つは、運営を主に4団体約２００人の市民が支えている点だ。資料整理や喫茶スペースを担当する「おだまき会」やガイド役の「三浦文学案内人」、朗読友の会「綾の会」。さらに朗読会が発展した朗読劇団「くるみの樹」。

「原罪」をテーマに深遠な心の苦闘を描き「人はいかに生きるべきか」と終生問い続けた綾子さん。記念館の見学のあと「病魔と幾多の苦難を乗り越え、慈愛と光と希望、さらに命と赦しを見出した奇跡の人」を感じたのは、多くの良き人たちの絶えざる優しさと温かさの支えがあふれているからだろうか。

三浦さん夫婦の自宅２階の書斎を移転、再現した記念館分館。長机を贈った福田さん（右）と村椿さんのお二人が偶然訪れていた。そこにはいまもまるで三浦さん夫妻が口述筆記しているようだ

＜はぎもと　かずゆき・フリーライター、元大学教員＞